

この手で守ろう、東京の水を

北区立王子第二小学校 五年二組

佐藤 せり花

大人になつたら、命がけで働かなければならない時がくるのだろうか。

私はこの夏、「塩狩峠」という本を読んだ。国鉄職員の主人公が、峠で逆走した列車を自ら犠牲にして止めた実話をもとにした小説だ。主人公は、使命感で立ち向かっていた。

そこで思い出したのが、小さい時に図書館

で見た広島の水道局の人の紙しばいだ。原爆が投下された日、非番だった職員の人自身が自身もやけどをしたにもかかわらず、市内に水を送るために一人で機械を動かし、強い使命感で水を送り続けたという。この使命感は、大人になつたら私も持てるのだろうか。

私が生まれた年に起きた東日本大震災の時も、あらゆるライフラインを守る会社の人達が全力で復旧してくれた。私は生後半年で、ミルクや離乳食に水がたくさん必要だった。

うだが、都内は水道が止まることなく、母は
安心したと聞いたことがある。ライフライン
とは、もとは英語で命綱という意味なのだそ
うだ。命綱は英語でアンビリカルコードと言
い、へその緒を指す。私はへその緒と水道と
いう命綱に守られてきたのだと思うと、多く
の人に感謝したい気持ちになった。

普段から食材や、水を貯めたりしているが
数日分しか貯めておくことはできない。へそ
の緒も心臓のはく動の度に赤ちゃんに酸素や



栄養を送っていて、止めることはできない。
水道局の人はそのことをわかっていながら必
死に水道管や浄水場を守っているんだ。水
の出が悪いとか、水がぬるいとか自分勝手に
文句を言っていた自分が恥ずかしくなった。
他にも、昨年からコロナウイルスが拡大する
中で、医療従事者の人も命がけで働いてくれ
たのに、ひぼう中傷をする人がいる。命がけ
で働く人に心無いことを言う人が、最近ふえ
ているように感じる。

こうした自分勝手なことを言う人が多いのは、当たり前前に色々なものが手に入ることになれていること、それからお金を払っているからという考え方があるからと私は思う。昔は、道路も自分たちで直して管理するという道普請という方法があった。そうだった。自分で自分の生活に必要なものを守るという考え方は今の私たちにも大切なことだ。私の祖父は自分の水源林の話をいつもうれしそうだけど真顔でいてねいに教えてくれる。いつまでも守

つてほしいという強い思いがあるからだろう。水道を個人で管理することはできないが、水源林を守る、無だに水を使わない、川を汚さない、という行動で道普請のような協力ができるのではないだろうか。

私達は、水が必要になり、ダムを作って水を手に入れてきた。昔は、けがと弁当は自分もち、という時代で、厳しい環境にもかかわらず東京に水を届けるために働いた人がいた。また、ダムをつくるために先祖代々の土地を

立ち退いた人がいた。そんな人達の思いを、水を飲んだり使用する人は決して忘れてはいけない。玉川兄弟も、工事のお金が尽きて自分の家を売り払ってまでして、玉川上水の工事費用にあてたという。私達はこれらの犠牲があつたからこそ、世界的な巨大都市、東京で水を自由に使うことができている。小河内ダムのことを調べた時に、こんな言葉を見た

「幾百万市民の生命を守り、帝都の御用水のための光栄ある犠牲である」

光栄ある犠牲なんてない。だから、私たちはその事実を忘れてはいけない。

今年、東京2020オリンピック、パラリンピックが無事開催された。多くの人が命をかけて作った小河内ダムで貯めた水を蛇口から飲む東京の水道を信頼しているからこそ世界中の人が日本、東京なら、と集まってきたと思う。私はそんな東京に生まれたことを誇りに思うし、この歴史を世界中の人に知ってもらいたいと強く思った。